

皇族の「養子」に関する史的考察

所

功

第一節 新旧『皇室典範』の「養子」否認

現行の『民法』では、親族編の第三章（親子）第二節「養子」に、第七九二条「成年に達した者は、養子をすることができる」以下の規定を設け、一般国民の養子縁組を公認している。⁽¹⁾しかしながら、現行の『皇室典範』では、第二章（皇族）の第二条に「天皇及び皇族は、養子をすることができない」と規定し、たとえば天皇が皇族を養子に取ること

も皇族が宮家へ養子に入ることも、すべて否認している。

もちろん、現行憲法の象徴天皇は、第一章（天皇）の第二条に「皇位は世襲」と明記される特別な身分であるから、一般国民と異なる例外的な規定を設けること自体は、問題ないであろう。ただ、この条文は、明治以来の旧『皇室典範』第七章（皇族）にあった第四二条「皇族ハ養子ヲ為スコトヲ得ス」を、基本的に引き継いだものであるが、新旧典範の制定当時と著しく状況の異なる今日（さらに将来）の皇室にとって、極めて難しい問題を孕んでいる。

そこで、あらためて旧典範の立法趣旨を振り返ると、起草の途中段階までは、後述のような親王宣下や庶子継承に伴う養子（猶子）などの是非も論議されていた。⁽²⁾しかし、それらを否定して成立した当該条に関する伊藤博文（井上毅

稿)の説明は、次のとおりである(片仮名を平仮名に改め、濁点・送り仮名などを補う)。

恭んで按ずるに、皇家養子・猶子の習あるは、蓋し嵯峨天皇の皇子源定を淳和天皇の子……とせられたるに始まる。……天皇の支系にして天皇の養子となるは、(源)融の孫是茂を光孝天皇の養子とせられたるに始まる。(中略)凡そ是れ皆、中世以来の沿習にして、古の典礼に非ざるなり。

本条は、独り異姓に於けるのみならず、皇族互に男女の養子を為すことを禁ずるは、宗系紊乱の門を塞ぐなり。其の皇猶子^{ゆうし}の事に及ばざるは、皇養子と同例なればなり。⁽³⁾

すなわち、皇室でも平安以来「養子・猶子の習」はあったが、「古の典礼に非ざる」沿習(因襲)にすぎないとみて、「宗系紊乱」つまり中国的な宗族(父系同族集団)の系統(同祖子孫秩序)が乱れることを防ぐために、たとえば異姓の一般男子を皇室に養子として入れることは勿論、皇族が相互に男子・女子の養子として宮家を継ぐようなことも、すべて禁じたのである。

その背景をみると、旧典範の制定(明治二十二年)当時、幕末維新を機に「近代宮家」が次々と創立され(ほとんど伏見宮の邦家親王流)、皇族男子の数が段々と多くなっていた。しかも典範では、皇族たる身位を律令(継嗣令)制のごとく四世までに限らず、男子孫に「永世皇族」制を認めている。従って、現に多い皇族が今後ますます増えていくと見込まれる。それゆえ、養子縁組までして宮家を存続させる必要がなく、むしろそれによって生じがちな混乱を防ぐ必要がある、と考えられたのであろう。

ただし、宮内省編『明治天皇紀』⁴⁾にも記されるとおり、すでに当時、永世皇族制については、枢密院会議で、内大臣三条実美が「百世の後に至るも皇族」とすれば、将来「枝葉繁盛の極、或は支給豊かならず 卻りて其の体面を汚すが如きことなきを保せず」と批判し、宮内大臣土方久らも賛同している。それに対して、法制局長官井上毅から「皇族

賜姓の事は古制に存せざる所」であり、むしろ「皇族の繁栄は国家のため卻りて賀すべきにあらずや」と原案弁護の説明がなされた。そして兩日「議論紛然」とした揚句、「遂に多数を以て原案に決」したのである。

ところが、「(明治)天皇、終始之を黙聴あらせたまひ……数日の後、(土方)久元を召して、前日の議は汝等の議する所(批判)正鵠を得たり、と告げたまふ」た。そこで、やがて帝室制度調査局(総裁のち伊東已代治)が慎重に検討を重ね、明治四十年(一九〇七)「皇室典範を増補し、(諸王)賜姓臣下に列するの条を加へたまひし」に至る。しかも、『明治天皇紀』は、それが「蓋し此の議(三条・土方らの批判)に原づく」と云ふ」と付記している。

しかるに、その後も皇族男子(諸王)で自ら臣籍降下する者は一例しかなかった。そのため、さらに検討を続けて、大正九年(一九二〇)「皇族の降下に関する内規」(「施行準則」)⁽⁵⁾が勅定され、「皇玄孫の子孫(五世以下)たる王……長子孫の系統、四世以内を除くの外、勅旨に依り家名を賜ひ華族に列す」ことが明示された。ただ、そのころ直宮^{じき}以外の宮家は、すべて室町初期に成立した伏見宮十六世第二〇代邦家親王の子孫が継いでいたから、例外的に「故邦家親王の子を一世とし実系に依り之を算す」と定められている。それゆえ、昭和に入っても、その二世(孫)か三世(曾孫)が当主の宮家は十以上あり、新典範の立案当時でも、四世(玄孫)にあたる若い方々が少なからず健在であった。⁽⁷⁾こうした状況では、近い将来、皇族が激減したり、男子のない宮家が断絶するようなことまで予想することは、困難だったかもしれない。そのせいか、「養子」を旧典範と同様に否認した新典範の第九条案は、衆議院でも貴族院でも是非の議論がなく、そのまま成立している。⁽⁸⁾

けれども、GHQにより皇室財産が凍結されたことなどから、まもなく直宮以外の十一宮家はすべて廃止されることになり、昭和二十二年(一九四七)十月、皇族男女五十一名が皇籍離脱を余儀なくされるに至った。その上、皇位と同様、宮家も男系の男子しか継承できないと定めた現行典範のもとで、後継者のない秩父宮・高松宮の両家が廃絶してし

まったのである。さらに、このまま進むならば、やがてほとんどの宮家が衰滅してしまうことにならざるをえない。

第二節 『皇室制度史料』の「養子」解説

このような現状を直視するならば、皇位および宮家の将来に備えて、現行典範で皇族の「養子」(および女性による宮家の継承)を否認していることが妥当か否か、真剣に再検討すべき段階を迎えていると思われる。とすれば、あらためて明治典範の制度以前に遡り、皇室における「養子」の制度と実態がどうであったかについて、史実を再確認することも決して無意味ではないであろう。

ところで、この問題に関しては、重宝な史料集が出ている。宮内庁編『皇室制度史料』の「皇族一」「皇族四」などである。⁽⁹⁾これは戦前の帝国学士院編『皇室制度史』を承けて、それよりも詳しく関係史料を列挙している。ただ、解題が簡潔すぎ、精選して収蔵された史料の意味も十分に読み取れない嫌いがある。よって、その概要を私なりに纏め直し、そのうち主要なケースについて具体例を挙げながら説明を加えよう(漢文は仮に書き下して引用する)。

まず日本における一般(公民)の「養子」制度は、つとに大宝・養老の『令』からあり、広く行われてきた。その「戸令」に「凡そ子無くんば、四等以上の親より昭穆しやぼくに合かなふ者を養ふことを聴せ。……」とある。これは『唐令』の「諸無レ子者、聴レ養下、同宗、於「昭穆」相当者上」に由来するが、唐制の養子は祖先祭祀のできる継承者の確保を主目的としている。従って、養子が可能な者は「同宗」(父系同祖子孫)でなければならず、しかも昭穆(長幼)を重んじて、父の次の世代の男子に限られる(同じ世代の兄弟や従兄弟などは不可)。ところが、日本の養子は、おもに父祖の「家業を継ぐ為め」であるから、四等以上(以内)の親(親族)であれば、必ずしも「同宗」に限られない。従って、兄

弟や従兄弟の子だけでなく、姉妹・従姉妹の子を養子とすることもできたと解されている。⁽¹⁾

一方、皇族の「養子」(史料にみえる「猶子」^{ゆうし}へ実の子の猶く遇^こする意)も「実子」(実の子と同じ扱いの意)も養子と同義)については、明確な規定がない。けれども、次のようなケースが行われている。

- ① 皇位の継承を目的として養子にする場合
- ② 宮家の相続を目的として養子にする場合
- ③ 名門の家に入って継嗣となる場合
- ④ 門跡に入って寺主を継承する場合
- ⑤ 女院の養子となり所領を伝承する場合
- ⑥ 武家などに嫁するため養子とされる場合
- ⑦ 特別に有力武将などの猶子とされる場合

右のうち、まず①は、大別すればA皇族(親王・諸王)の誰かを皇位継承者⇨皇嗣とするため、天皇か上皇の養子とする場合と、B側室所生(庶出)の皇子を皇嗣とするため、嫡配后妃(皇后・准后)の養子とする場合がある。このAとBについては、第三・四節で具体例を示そう。

それに対して、②および③以下は、皇位と直接関係しない(②は一部関係がある)。いずれも皇族(皇子・皇女や宮家の王・女王)を各々の目的(②は世襲の宮家を相続するため、③は藤原氏などの名門を継承するため、④は門跡の寺主を継承するため、⑤は女院の所領を伝承するため、⑥は武家などに嫁するため、⑦はおもに政略のため)に応じて、養子とする場合である。このうち、とくに②は、天皇か上皇の養子とすることが多いので、第五節に具体例を示そう。しかし、③以下については、本稿に関係が少いため、紙幅の都合により割愛する。

第三節 皇位の継承を目的とする「養子」A

皇位の継承は、当代から直系の長子孫へと続くことが望ましい、と一般的に考えられよう。しかしながら現実的には、当代に皇子・孫王がなくて、兄弟（従兄弟）やその子孫などへ移るとか、かつては皇子や孫王がいても、嫡配でなく側室の所生ということが珍しくなかった。そういう場合、直系でない皇族（兄弟や遠縁）を天皇か上皇の養子にする（A）とか、庶子を嫡配（皇后・准后）の養子とする（B）ことが、中世・近世に数多くみられる。

1 兄弟の養子

まずAのうち、兄弟間の養子を例示しよう。鎌倉時代の皇位継承は、いわゆる大覚寺統（大）と持明院統（持）の間で争われていた。そのため、第九三代後伏見天皇（持）は、永仁元年（一二九八）七月、十一歳で践祚されたが、龜山法皇（大）の猛烈な働きかけにより、後宇多上皇（大）の皇子邦治親王を皇太子に立て、まもなく正安三年（一三〇一）正月、その皇太子＝第九四代後二条天皇（十七歳）に譲位せざるをえなくなった。しかし、当時まだ後継の皇子がなかったから、伏見上皇（持）の強い働きかけにより、その皇子富仁親王（五歳）が後伏見上皇（十四歳）の「猶子」とされ皇太子に立てられた（系図A②）。同年九月一日の「伏見上皇御消息案」に、次のごとく記されている（丸括弧内は私注、以下同）。

端裏書
「伏見院より（後伏見）院に進らるゝ御書の案、春宮（富仁親王）御猶子の事」

今度立坊の事、御猶子と為す儀、已に其の望みを達し候ふ上は、始終偏に御意に任さるべく候。……（後伏見院に）皇子未だ出来ざるの間、其の仁（皇嗣）無きに就き、御猶子の号に依りて立坊すること已に了んぬ。皇子出生

の時は、嫡係と為すの儀、向後、継体一流の外更に悋望有るべからず候。……

この富仁親王(持)は、踐祚して第九代花園天皇となられ、そのさい皇太子に立てられた尊治親王(天)が、踐祚して第九代後醍醐天皇となられた。しかしながら、その皇太子に立てられた甥の邦良親王(天)の急逝により、後伏見上皇(持)の皇子量仁親王が皇太子に立てられると、それを承服されない後醍醐天皇は、元弘元年(一三三一)八月、挙兵して笠置に遷られた。そこで、まもなく北条氏の申し入れによって、量仁親王(十八歳)が踐祚し、北朝初代光厳天皇となられた。ところが、後醍醐天皇は隠岐に流されても屈せず、元弘三年(北朝では正慶二年)五月、京都に戻って光厳天皇を廃し、親政に取り組まれたのである。

けれども、いわゆる建武の新政は三年足らずで行き詰り、謀反した足利高氏が、建武三年(一三三六)六月、光厳上皇を奉じて京へ入り、上皇(二十四歳)の弟豊仁親王(十六歳)を上皇の養子とすることで北朝二代光明天皇に擁立した(系図A⑥)。南北朝期成立の『保暦間記』によれば、この六月「新院(光厳上皇)の御一腹の御弟豊仁親王を新院の御為子の儀にて、御位に即け奉り給ひけり」とみえる。また一条兼良の『玉英記抄』にも、後醍醐天皇の崩御(延元四年八月)に関連して、「当今(光明天皇)は偏に(光厳)院の御子の儀なり」と記されている。

この二例にみられるような、兄から弟への皇位継承は珍しくないが、その関係をあえて「猶子」(養子)としているのは、継承の正統性(正当性)を強調するためであったかと思われる⁽¹²⁾。しかも、それが一層必要なのは、当代と遠縁の皇族が皇位を継承する場合である。

2 遠縁の養子

たとえば、第一〇〇代後小松天皇の皇子実仁親王は、十二歳で踐祚して称光天皇となられたが、十五年後の正長元年

(一四二八) 七月、皇子女のないまま病没してしまわれた。そのころ、後龜山上皇の孫聖承王(小倉宮)は、足利氏が南北朝合一の条件(今後両統迭立たるべきこと)を破り、後小松天皇の次に長子の称光天皇を立てたことに抗議し、南朝の遺臣(伊勢国司北畠満雅ら)と兵を挙げ戦っていたが、持明院統内でも争いのため皇太子を決めるに至っていなかったのである。

そこで、『満濟准后日記』によれば、後小松上皇(五二歳)は、天皇臨終間近の七月十六日、將軍足利義教の申し入れを受けて、「伏見殿宮(彦仁王)を以て御猶子と為す」べきことを勅書に載せられた。彦仁王というのは、北朝三代崇光天皇の曾孫(貞成親王の王子)であるから、崇光天皇の弟の北朝四代後光厳天皇の孫にあたる後小松上皇とは、七親等も離れている(系図A⑥)。それでも、天皇の崩御から一週間後(二十八日)、「伏見殿貞成王若宮(彦仁王)十歳」は、「(後小松)上皇の御猶子」ゆえに踐祚され、第一〇二代後花園天皇となられたのである。その上、万里小路時房の『建内記』文安四年(一四四七)四月十三日条によれば、当代の後花園天皇は「後小松院の御所生の如く御父子の儀を契約せられ」るのみならず、「光範院(後小松上皇正室)も御実母の如く御契約なり。而して御実母准后宣下の詔書に「朕の母」の由を載せ奉るべきの由、勅定有るか」とみえる。

もう一例あげると、江戸後期の第一一九代光格天皇は、前代の後桃園天皇と七親等も離れている(系図A④参照)。

そのころ、東山天皇の後は、三代順調に父子相承されていた。ただ、桃園天皇が二十二歳で崩御されたので、姉の後桜町女帝(二十三歳)が中継ぎを務め、八年後に弟君の遺児英仁親王Ⅱ後桃園天皇への譲位を果たされた。ところが、その後桃園天皇も、安永八年(一七七九)十月、僅か二十二歳で病没してしまわれたのである(遺児は皇女のみ)。

そこで、崩御直前、後見役の後桜町上皇や重臣らが緊急協議の結果、閑院宮第二代典仁親王(東山天皇の孫)の第六子である祐宮兼仁王(九歳)こそ、「天性聡明、至尊と仰ぐべき人体なり」(『広橋勝胤卿記』)と認められるので、この

「さちの宮（兼仁王）、御養子しかるべきの事」「祐宮と女一宮（欣子）、親王宣下あるべき事」などが示された（『後桃園院御凶事前後記』）。また野宮定晴の『定晴日記』同年十一月九日条には、次のごとく記されている。

主上（後桃園天皇）……御継体無きに依り、帥宮（典仁親王）息男祐宮（兼仁王）九歳、御養子と為して御踐祚有るべきの旨、叡慮御治定し仰せ出され候ふ事／准后（藤原維子）を以て御養母と定められ候ふ事。

つまり、閑門院宮家の兼仁親王Ⅱ光格天皇は、再従兄弟の桃園天皇の遺児である後桃園天皇の崩御に伴い、急抛皇嗣に立てられた。その際、前帝と女御藤原維子の間に生まれた欣子（一歳）を内親王とし（将来天皇の嫡配に入れる前提の措置）、また前帝の「御養子」とするのみならず、前帝の女御「准后」を「養母」とすることによって、踐祚できたのである。

このように後花園天皇も光格天皇も、前帝に後継皇子がおられないため、七親等以上も離れた遠縁から迎えられた。そのさい、傍系継承の正当性（正統性）を強化するには、前々帝（上皇）の「御猶子」ないし前帝の「御養子」とする必要があるのだらうと思われる。

第四節 皇位の継承を目的とする「養子」 B

1 女御・中宮の養子

一方、Bの例は、およそ二種類ある。その一つは平安時代からみられるが、たとえば、第五九代宇多天皇の女御藤原温子（関白基経の娘）は、次の醍醐天皇の「継母」「養母」となっている（『日本紀略』延長七年六月七日条等）。醍醐天皇（敦仁親王）の生母は女御藤原胤子（北家傍流高藤の娘）であるが、後に入った女御温子が嫡配となった。しか

も、敦仁親王が立太子した三年後（寛平八年）、胤子が他界してしまったため、宇多天皇は皇子のいない温子を皇太子の「養母」とされたのであろう（系図B④）。それによって、その翌年（八九七）敦仁皇太子への譲位を順調ならしめられたものとみられる。

また第七八代二条天皇の中宮藤原育子（関白基実の猶子、実父は実能）は、次の六条天皇（順仁親王）の養母となっている。長寛二年（一一六四）に生まれた順仁親王の実母は伊岐致遠の娘である。その翌年（永万元年）六月、二条天皇は重病のため譲位（翌年崩御）されるが、それに先立って、生後八ヶ月の順仁親王を、皇子女のない中宮育子の養子としたうえで、践祚せしめられた（系図B⑤）。『顕広王記』同年六月二十五日条裏書に、次のごとく記されている。

去る四月中旬以降（二条天皇）御不予の事あり。……仍て第一皇子（順仁親王）を以て六月二十五日立太子の事あるべし。……養育せる中宮（藤原育子）の一宮として此の事（受禪踐作）あるか。……

2 中宮・女院の養子

もう一つは江戸時代に多くみられる。庶出の皇子は、父帝の中宮・女院の「養子」「猶子」となってから践祚されたのである。

たとえば、第一〇八代後水尾天皇の後には、その皇女と皇子により四代相承されたが、中宮の源和子（徳川秀忠の娘）Ⅱ東福門院の所生は、明正女帝だけである。そこで、次の後光明天皇（紹仁親王）は、宮人藤原光子（園基音の娘）の所生にて、寛永十九年（一六四二）閏九月、「女院（東福門院）の御養子」とされ（系図B⑥）、その上で親王宣下を受け、翌二十年十月、姉君の譲位により十一歳で践祚された（『尚嗣公記』『道房公記』）。ついで後西天皇（良仁親王）も、宮人藤原隆子（櫛笥隆政の娘）にて、兄君の急逝に伴い、承応三年（一六六四）十月、十八歳で「女院の御養子」

とされ(系図B③)、翌年践祚しておられる(『後光明院御弔記』『三宝院日次記』)。さらに靈元天皇(識仁親王)も、宮人藤原国子(園基音の娘)の所生ながら、幼少より父上皇の期待をうけ、明暦四年(一六五八)正月、五歳で「女院御所の御猶子」として親王宣下を受け(系図B④)、五年後に兄帝讓位の後を継いでおられる(『二条殿日次記』)。

また、前述のごとく第一一九代光格天皇は、先帝の遺児欣子内親王を中宮(皇后)に迎え、その間に温仁親王が生まれたけれども、寛政十二年(一八〇〇)に薨じてしまう。そこで、天皇と典侍藤原婧子(勸修寺経逸の娘)との間に生まれていた寛宮恵仁親王が、文化四年(一八〇七)七月、八歳で「中宮御所の御実子」として「儲君」(皇位継承者)に治定され親王宣下を受け、十年後(同十四年三月)に践祚して第一二〇代仁孝天皇となられた(系図B⑤)。

ついで仁孝天皇は、関白鷹司政熙の娘繫子を女御(准后)とされ、まもなく安仁親王が生まれたけれども、文政四年(一八二一)薨じてしまう。そこで、天皇と典侍藤原雅子(正親町実光の娘)との間に生まれた熙宮統仁親王が、天保六年(一八三五)六月、五歳で「准后御方の御養子、御実子御同様」として「儲君」に定められ親王宣下を受け、十一年後(弘化三年二月)に践祚して第一二一代孝明天皇となられた(系図B⑥)。

さらに孝明天皇は、関白九条尚忠の娘夙子を女御(准后)とされたが、その間に皇女しか生まれていない。そこで、天皇と典侍藤原慶子(中山忠能の娘)との間に生まれていた祐宮睦仁親王が、万延元年(一八六〇)七月、九歳で「准后御方の御実子」として「儲君」に治定され、七年後(慶応三年一月)に践祚して第一二二代明治天皇となられたのである(系図B⑦)。

しかも、このような養子縁組は、近代に入っても残っている。すなわち、明治天皇は左大臣一条忠香の娘美子(はる)を皇后とされたが、その間に皇子も皇女も生まれていない。そこで、天皇と典侍藤原愛子(柳原光愛の娘)との間に生まれた明宮嘉仁親王が、明治二十年(一八八八)八月三十一日(満八歳の御誕生日)に「明宮殿下、追々御成長に付き、儲君

御治定。今上の御例に依り、皇后の御実子」とされた（系図B⑪）。その旨を伝えられた嘉仁親王（のち大正天皇）は、直ちに参内して明治天皇と昭憲皇后に対面し、祝宴を賜わっている（『皇親録』）。

以上、皇位の継承を主な目的とする「養子」（猶子・実子）として、A・Bの具体例をみてきた。このうち、Aでは、兄弟ないし遠縁の皇嗣を先帝か上皇の「養子」とすることによって、直系父子継承に類似させることができる。また、Bの多くは、側室所生を皇嗣とするために正室（皇后・女院）の「猶子」「実子」とすることによって、嫡出皇子への継承に類似させることができる。それは共に、その継承の正当性（正統性）を補強しようとしたものとみられ、その目的は相応に達成されたと考えてよいであろう。

第五節 宮家の相続を目的とする「養子」

これに対して、皇位の継承とは異なるが、養子とされることによって親王宣下を蒙り、その上で宮家を相続した例も少ない。そのうち、いわゆる四親王家（伏見宮・桂宮・有栖川宮・閑院宮）の実情を略述しよう。

1 伏見宮家

まず伏見宮家は、北朝三代崇光天皇の皇子榮仁親王を初代、その王子治仁王を二代とする。しかし、世襲宮家としては、榮仁親王の王子貞成王が、応永三十二年（一四二五）四月、「仙洞」Ⅱ「院」後小松上皇の「御猶子」とされて親王宣下を受け、伏見の居所名により「伏見宮」と号されてからである（『貞成親王 親王宣下記』『薩成記』）。この伏見宮家は、以後二十代以上にわたって続くが、その都度、当代の養子（猶子）となり親王宣下を受けている（系図c⁽¹³⁾あ）。

C 皇統と世襲親王家の関係

皇統：北=北朝（持明院統）

3桁数字=「皇統譜」による歴代数

宮家：①～②②=伏見宮家（あ）

①~⑪=桂宮家 (い)

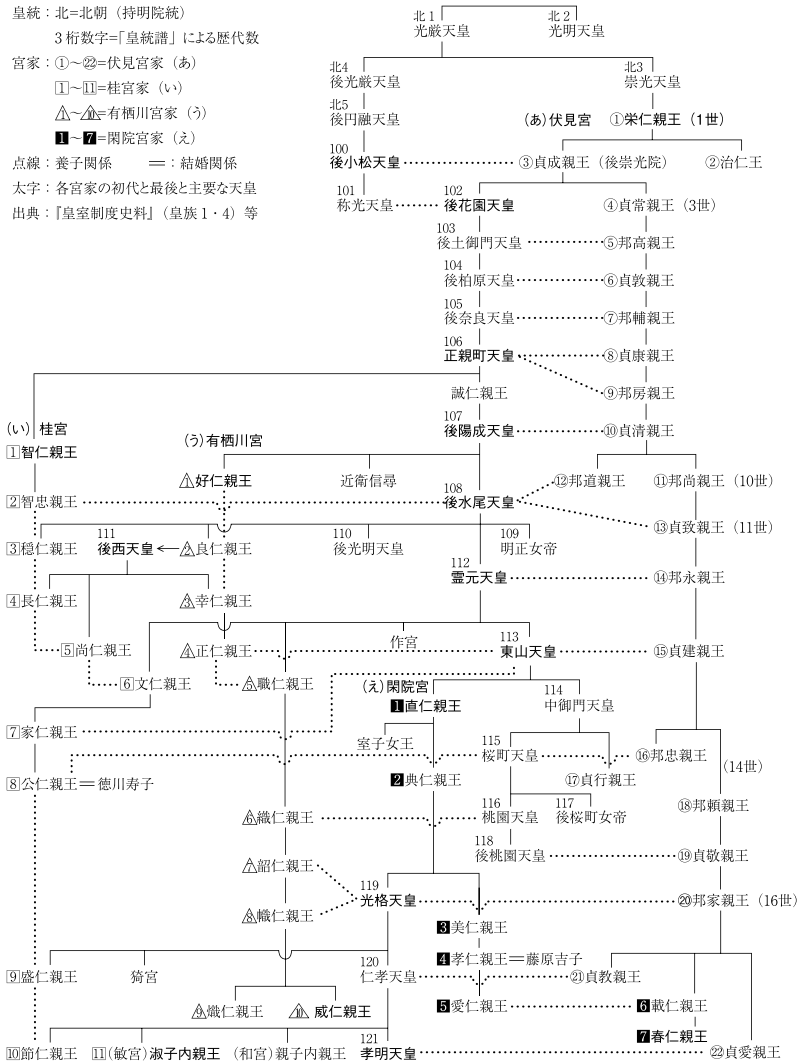
△～△10=有栖川宮家 (5)

■1~7=閑院宮家（え）

点線：養子関係 ≡：結婚関係

太字：各宮家の初代と最後と主要な天皇

出典：『皇室制度史料』（皇族1・4）等



すなわち、第三代貞成親王（のち後崇光院）の後を継いだ貞常王は、文安二年（一四四五）六月に親王宣下を受けた。ついで、その「若宮」邦高王は、文明元年（一四七四）四月、「主上」後土御門天皇の「御猶子」となり、その「御子」貞敦王は、文龜四年（一五〇四）二月、「当今」後柏原天皇の「御猶子」となり、その次の「若宮」邦輔王は、享祿四年（一五三一）四月、後奈良天皇の「御猶子」に、次の貞康王と邦房王は、永祿六年（一五六三）十二月と天正三年（一五七五）二月、共に正親町天皇の「御ゆうし」となり、その邦房親王の「若宮」貞清王は、慶長四年（一五九九）十二月、後陽成天皇の「御ゆうし」となっている。

ついで江戸時代に入ってから、貞清親王の「若宮」邦道王は、正保二年（一六四五）十一月、「仙洞」後水尾上皇の「御猶子」となり、また邦尚親王の「御子」貞致王も、万治三年（一六六〇）七月、「後水尾院の猶子」となり、その「ふしみ殿」貞致親王の「若宮」邦永王は、天和三年（一六八三）三月、霊元天皇の「御ゆうし」となり、その「若宮」貞建王は、宝永五年（一七〇八）十二月、「主上」東山天皇の「御猶子」となり、その「若宮」邦忠王は、寛保二年（一七四二）三月、桜町天皇の「御ゆうし」となっている。

ただ、その次は邦忠親王が宝暦九年（一七五九）六月薨じたので、翌十年に誕生した中御門天皇の「二宮」が「伏見宮の御相続」と決まり、第十七代貞行親王となったけれども、安永元年（一七七二）六月、十三歳で薨じてしまう。そこで、第十五代貞建親王の王子邦頼王は、すでに勧修寺へ入っていたけれども、安永三年（一七七四）十二月還俗して第十八代となった。

その「若宮」貞敬王は、寛政九年（一七九七）閏七月、「先帝後桃園院様の御猶子」になり、その「若宮」邦家王も文化十四年（一八一七）正月、「当今」光格天皇の「御猶子」となったが、天保十三年（一八四三）八月に閉門落飾（二年後に復飾）した。そのため、次の貞教親王は、弘化四年（一八四七）五月、「先帝仁孝天皇の御猶子」とされ、

また次の貞愛親王も、万延元年（一八六〇）六月、「当今」孝明天皇の「御養子」とされている。

2 桂宮家

ついで桂宮（もと八条宮Ⅱ京極宮と称した）家は、第一〇六代正親町天皇の孫にあたる王子（幼称六宮）が、天正十八年（一五九〇）二月「八条宮」の創設を認められ、翌年正月、親王宣下されて初代智仁親王^{（とひと）}となった^{（14）}（系図c^{（i）}）。その別邸が桂川の辺にあったので、後に「桂宮」と号される。当宮家は、天皇か上皇の皇子を養子に迎えて後嗣とした例が多い。

すなわち、二代智忠親王は、寛永元年（一六二四）七月「当今様」後水尾天皇の「御猶子」として親王宣下を受けたが、後嗣に恵まれず、承応三年（一六五四）八月、「本院」後水尾上皇の「二宮」（幸宮）を「御養子」として迎えた。ところが、この三代穩仁親王も、後嗣のないまま寛文五年（一六六五）十月に二十三歳で薨じたため、「当今」後西天皇の「一宮」が「御養子」に迎えられた。また、この四代長仁親王も後嗣に恵まれず、延宝三年（一六七五）六月、二十一歳で薨ずる際、自らの弟「員宮」を「嗣たるべきよし……遺言」したので、「後西院の御八皇子」（員宮）が「猶子」とされた。

さらに、この第五代尚仁親王も、元禄二年（一六八九）八月、十九歳で薨じたため、その六月に生まれた靈元上皇の皇子「作宮」を後嗣としたが、親王宣下のないまま四歳で他界してしまふ（従って、代数に入れない）。そこで、当時すでに有栖川宮の養子となっていた「富貴宮」（靈元上皇の皇子）が、元禄九年（一六九六）七月、「京極宮」を継ぐことになり、翌十年五月、第六代文仁親王となったのである。

ついで、この文仁親王の「若宮」は、宝永五年（一七〇八）十二月、「禁裏」東山天皇の「御猶子」として第七代の

家仁親王となり、次の「若宮」も、延享二年（一七五四）二月、「当今」桜町天皇の「御猶子」として第八代公仁親王となった。ところが、その公仁親王は、先妻の室子女王（閑院宮直仁親王の娘）が薨じた後、後妻に徳川寿子（紀州藩主宗直の娘）を娶ったが、男子に恵まれないまま、明和七年（一七七〇）六月に薨じた。

しかし、当時は皇子・王子が少く、皇位も桃園天皇亡き後、姉の後桜町女帝が継がれるような状態であった。⁽¹⁵⁾そのため、桂宮家はとりあえず「相君」（妃徳川寿子、二十八歳）が「御家主」の役割を預かることになる。けれども、寛政元年（一七八九）十月、その病没により、無主となってしまった。

そこで、光格天皇は、八代薨去から四十年後の文化七年（一八一〇）六月に誕生した皇子の磐宮を、京極宮Ⅱ桂宮の第九代盛仁親王とされたが、この親王も翌八年五月天逝したので、再び無主となる。そのため、同十三年（一八一六）正月、桂宮家から光格天皇の皇子猗宮に「御家の御相続」を願い出たが、この猗宮も文政二年（一八一九）正月に夭逝したので、さらに空白が続く。しかし、次の仁孝天皇と藤原雅子（のち新待賢門院）との間に、天保四年（一八三三）十一月、統仁親王（のち孝明天皇）の弟として、幹宮が生まれた。よって、その幹宮が同六年七月「御家の御相続」と決められ、第十代節仁親王となった。ところが、この親王も翌七年三月に夭逝したので、三たび無主となる。

そのころ、当代の皇子は統仁親王のみで、宮家の王子も継嗣以外ほとんど出家していた。ただ、皇女であれば、弘化三年（一八四六）生まれの和宮親子内親王だけでなく、文化十二年（一八二九）に生まれた姉の敏宮などもいた。この敏宮は、婚約していた閑院宮愛仁親王が天保十三年（一八四二）九月に薨去したので、直ちに親王宣下を受けて淑子内親王と称し、長らく独身生活を送っていた。そこで、文久二年（一八六二）十月、桂宮家の家司たちが、三十四歳の彼女を「当御所の御相続」に願い出たところ、孝明天皇から「願の通り」聴許された。ここに初めて内親王（皇族女子）⁽¹⁶⁾の宮家当主が誕生したのである。

3 有栖川宮家

つぎに有栖川宮（もと高松宮Ⅱ花町宮）家は、第一〇七代後陽成天皇の皇子（幼称七宮）が、慶長十年（一六〇五）十二月、三歳で親王宣下を受けて好仁親王と称し、寛永二年（一六二五）十月「高松宮」の創立を認められた（系図c（う））。宮号は養母「新上東門院」勸修寺晴子（後陽成天皇生母）の「御旧跡高松殿」に由来する。

しかし、この初代好仁親王は、王子がないまま寛永十五年（一六三八）六月に薨じたので、しばらく無主となる。その第二代を正保四年（一六四七）十一月に継いだのは、後水尾天皇の皇子「秀宮」（良仁親王）である。ところが、この良仁親王は、異母兄の後光明天皇が承応三年（一六五四）十一月崩御されたのに伴い、十七歳で践祚して第一一代後西天皇となられたので、再び無主となる。そこで後西天皇は、寛文七年（一六六七）四月、十二歳の皇子幸仁親王を入れて第三代とされ、そのさい後水尾上皇により宮号が有栖川宮と改められた。ついで第四代は、王子の正仁王が元禄十二年（一六五九）七月に相続し、宝永五年（一七〇八）正月「禁裏様」東山天皇の「御猶子」とされ、まもなく親王宣下を受けている。

ただ、この正仁親王は、未婚のまま享保元年（一七一六）九月、二十三歳で薨じてしまう。そこで、霊元上皇は、同年十月、四歳の皇子明宮を入れて第五代とされ、親王宣下して職仁親王と名づけられた。これ以後、当宮家は順調に父子相続が続いていく。すなわち、まず第六代織仁親王は、「先帝様」桃園天皇が「御在世中に御猶子」とされて、宝暦十三年（一七六三）十月に親王宣下を受け、ついで第七代詔仁親王は、文化四年（一八〇七）十二月、「禁裏様」光格天皇の「御猶子」とされて、翌五年三月に親王宣下を受け、さらに第八代熈仁親王も、文政五年（一八二三）十一月、「仙洞御所」光格上皇の「御猶子」とされて、翌六年九月に親王宣下を受けている。

この熈仁親王は、明治四年（一八七一）七月に六十歳で隠居して、王子の熈仁親王が第九代となった。しかし、その

親王に王子がないため、同十一年（一八七八）八月、弟の威仁親王^{たけ}が継嗣と定められ、同二十八年一月、兄宮の薨去により第十代を継いだ。ところが、この親王は、継嗣裁仁王に先立たれ、大正二年（一九一三）七月、五十二歳で薨去した。その結果、前述の桂宮家と同様、三百年近く続いた有栖川宮家も、廃絶のやむなきに至ったのである。

4 閑院宮家

さらに、新井白石の建議を容れて新たに創立された閑院宮家は、第一・三代東山天皇の皇子「秀宮」が、享保三年（一七一八）正月、前帝靈元上皇より宮号を賜わり、親王宣下を受けて初代直仁親王となった。⁽¹⁷⁾ 宮号は清和天皇の皇子貞元親王の号「閑院」に由来する。当宮家は五代まで順調に父子相続が続く（系図c）。

すなわち、第二代典仁親王^{すけ}は、寛保二年（一七四二）二月、桜町天皇の「御猶子」とされて、翌三年九月に親王宣下を受けた。第三代美仁親王^{はる}は、宝暦十二年（一七六二）十二月、先代と同じく桃園天皇の「御猶子」とされて、翌十三年十月に親王宣下を受けた。第四代孝仁親王^{たつ}は、文化四年（一八〇七）十二月、光格天皇の「御猶子」とされて、翌五年三月に親王宣下を受けている。また、第五代愛仁親王^{なほ}は、文政七年（一八二四）二月、父宮の薨去によって七歳で「御家督」を継ぎ、同十一年四月「仙洞」光格上皇の「御猶子」とされ、まもなく親王宣下を受けた。

しかし、この愛仁親王は継嗣のないまま天保十三年（一八四二）九月、二十五歳で薨じたため、先代の妃藤原吉子（微妙覚院）を「御家主御同様」として宮家の維持に努めた。やがて慶応元年（一八六五）九月、伏見宮邦家親王の庶子として生まれた「易宮」^{たか}は、いったん醍醐三宝院に入るが、明治五年（一八七二）正月、空主の閑院宮家を継ぎ、第十六代載仁親王^{もと}となった。ついで同三十五年（一九〇二）八月に生まれた春仁王が、昭和二十年（一九四五）五月、父宮の薨去により第七代を継いだ。けれども、この春仁親王には継嗣がなく、やがて昭和二十二年十月、他の十宮家と同じ

く皇籍離脱を余儀なくされ、それより閑院を家名（苗字）としている（同六十三年六月歿）。

本節では、四親王家の相続次第をみてきた。上述のとおり、明治二十二年（一八八九）二月制定の『皇室典範』以前は、大宝以来の令制により、「親王」は天皇の皇子か兄弟に限られる。従って、孫王以下（玄孫王まで）の人々が宮家を相続するには、天皇か上皇の養子（猶子）となり「親王」の宣下を受ける必要があったのである。また継嗣のない宮家では、当代か上皇の皇子（一例のみ皇女）を養子として迎え存続をはかってきた。しかしながら、それでも桂宮家と有栖川宮家には継嗣がなくなり、絶家となってしまったのである。

むすび―未来への推考―

以上、皇族の「養子」について、明治典範制定以前の歴史を振り返り、それが皇位と宮家の継承にも少なからず機能してきた事例を紹介した。最後に、主題と関連のある近未来の問題点についての推考を略述し、結びに代えよう。

それは、将来の皇位継承における天皇と皇太子との関係である。現行の『皇室典範』によれば、「皇位」を継承する資格は「皇統に属する男系の男子」に限られ、その男子も天皇の直系・長系の子孫が優先される（第一条・第二条）。

それを現存の皇族男子にあてはめれば、D図のとおり、今上天皇の後には、①直系長子の皇太子徳仁親王^{なるひと}、②直系次子の秋篠宮文仁親王^{ふみひと}、③同宮長子の悠仁親王^{ひさひと}（以下④―⑥―⑦）の順となる（平成二十二年（二〇一〇）九月現在）。

それゆえ、現行典範のまま推移すれば、まことに畏れ多い想定ながら、今上陛下が昭和天皇よりも数年長寿を保たれるとして、仮に二十年後（平成四十二年＝二〇三〇）皇位継承が行われるとした場合、①現皇太子は七十歳、②秋篠宮は六十四歳、③悠仁親王は二十四歳である（ちなみに、眞子内親王は三十八歳、佳子内親王は三十五歳、愛子内親王は

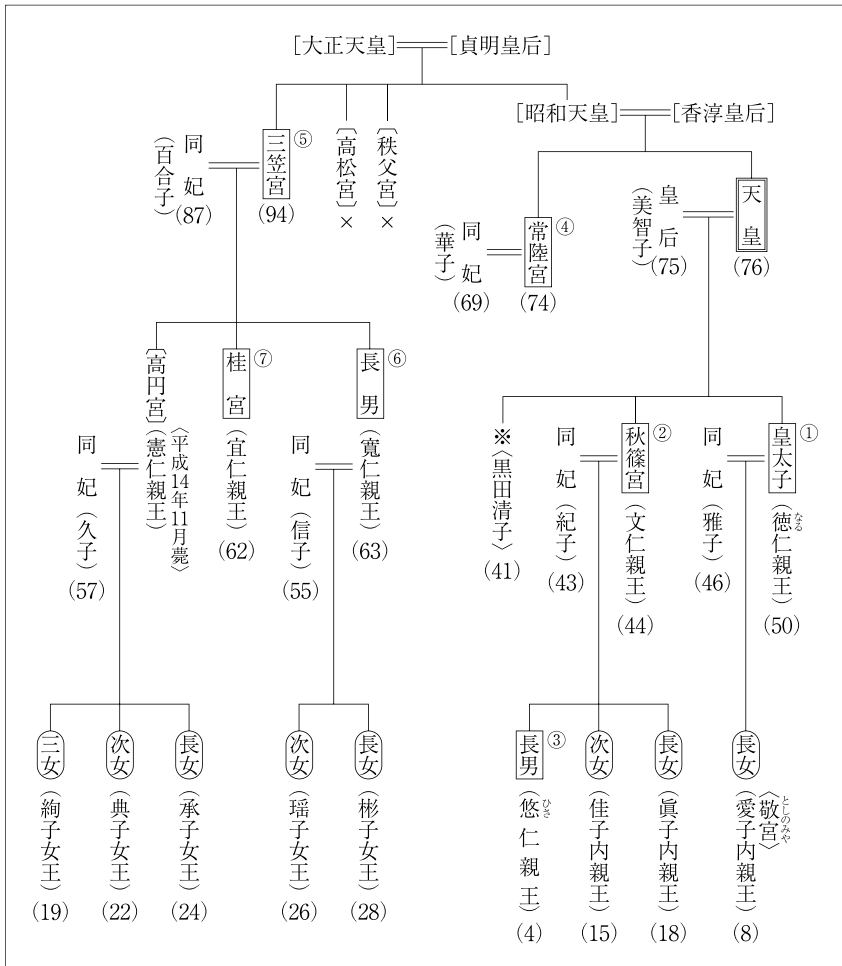
二十八歳)。その時点で第一二六代天皇の新皇太子は、弟君の文仁親王が秋篠宮家の当主を離れ、皇太弟として立たれることになるが、その長男悠仁親王は、秋篠宮家を継承されるに留まる(そのころ姉君の眞子・佳子両内親王は、すでに結婚され皇籍を離れておられる可能性が高い)。

さらに、それから仮に二十年後(二〇五〇)、次の皇位継承が行われるとした場合、第一二七代天皇は八十四歳、そのもとで四十四歳の悠仁親王が秋篠宮家を離れて、ようやく初めて皇太子の地位をえられることになる(それまでに同親王が結婚され男子を授かっておられたら、その男子が秋篠宮家は継ぎうるけれども、仮に女子だけならば、絶家となる虞れがある)。もちろん、老少不定、本当のところ一寸先も判らないのであるが、制度論を具体的に考えるため、仮にこのような予測をしてみると、はたしてこれでよいのか、これ以外に道がないのか、と想わざるをえない。⁽¹⁸⁾

そこで、あらためて皇位継承の在り方を考えてみると、旧典範も新典範も基本原則としている直系・長系を優先することには十分意味があり、それによって世代の自然な交替を実現しやすい道筋を作っておくことが望ましいであろう。そのためには、旧典範も新典範も全面否認している「皇族間の養子」を容認する法改正の必要があると思われる。もし皇族養子が複数以上できるならば、御子のない又は女子しかない宮家を継ぐこともできるが、それを皇位の継承者にも応用・適用することを検討してもよいのではなからうか。

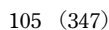
端的に申せば、現皇太子のもとに皇子の誕生が至難と判断されるならば、秋篠宮家の悠仁親王を皇太子の「養子」(秋篠宮家で従来どおりの実生活が続けられて差し支えない名目養子)とする。そうしておけば、現皇太子の皇位継承時点で、養子の悠仁親王を新皇太子に立てることが可能となる。もっとも、それは当事者たちにとって甚だ微妙な問題を多分に含んでいるから、慎重に考慮しなければならないが、ひとつの試案として検討されるならば幸いである。

D 現皇室の構成者



() 数字は平成22年 (2010) 9月現在の満年齢 ○内は現行典範による皇位継承順位
 ①皇太子=昭和35年 (1960) 2月23日生れ、②秋篠宮=昭和40年 (1965) 11月30日生れ、
 ③悠仁親王=平成18年 (2006) 9月6日生れ。なお「敬宮」(結婚までの称号で、宮家号とは全く異り、天皇か皇太子の皇子・皇女にのみ付けられる) 愛子内親王=平成13年 (2001) 12月1日生れ。※もと紀宮清子内親王は平成17年11月15日降嫁 (結婚)

E 近代宮家(直宮以外)のうち皇女降嫁の宮家構成



- (1) 山島正男氏『注釈民法(24)』(有斐閣、平成六年) 九一〜九三頁、内田貴氏『民法Ⅳ(親族・相続)』補訂版(東大出版会、平成十六年) 二四七〜二五〇頁などに、養子制度の来歴も略述されている。
 - (2) 小林宏・島善高両氏編『明治皇室典範』上(日本立法資料全集16)(信山社、平成八年) 七〜一六頁
 - (3) 伊藤博文(宮沢俊義氏校注)『憲法(典範)義解』(岩波文庫、昭和十五年) 一六四頁。文中にみえる源定や源是茂らの養子例は、注(9)『皇室制度史料』に詳しい。なお、旧典範下でも、明治四十年(一九〇七)の典範増補第二条により「王は、勅許に依り華族の養子となることができる」ようになっていた。
 - (4) 宮内庁編『明治天皇紀』第七(吉川弘文館、昭和四十七年) 七四頁。典拠は『枢密院會議記録』等。当初の「皇族令」草案には、世襲の四親王家も代々の親王宣下も廃し、五世王以下を華族に降すことなどが盛り込まれていた。
 - (5) 「内規」案の「審査報告」(大正九年三月十三日付)に「王は皇玄孫(四世)の長子孫の系統四世まで、即ち天皇より八世まで各世一人に限り皇族の班列に留めて尊榮の地位を保たしめ、其の他の王は総て臣籍に降下せしむ」と説明されている。この案を補訂して同年五月十九日に勅定された「施行準則」は、第二条に「皇玄孫(四世の親王)の子孫たる王(八世王まで)、明治四十年二月十一日勅定の皇室典範増補第一条、及皇族身位令第二十五条の規定に依り(自発的に)情願を為さざるときは、長子孫の系統四世以上(八世まで)を除くの外、(すべて)勅旨に依り、家名を賜ひ華族に列す」と定め、付則で「但し第一条に定めたる世数は、故邦家親王の子を(特例)一世とし(特例四世まで)実系に依り之を算す」と断っている。なお、梶田明宏・内藤一成両氏『倉富勇三郎日記』「皇族ノ降下ニ関スル施行準則」(『書陵部紀要』第五二号、平成十三年)によって、枢密院関係者の複雑な意向・論議が詳しく判る。
 - (6) 大正九年(一九二〇)当時、すでに桂宮家と有栖川宮家は廃絶していたが、伏見宮家は邦家親王の王子貞愛親王が兄貞教親王の後を継いで第二十二代となり、閑院宮家も邦家親王の王子載仁親王が愛仁親王の養子に入り第六代を継いでいた。また近代に創立された山階宮家の初代晃親王(当時は孫の武彦王)、久邇宮家の初代朝彦親王(当時は子の邦彦王)、北白川宮の初代智成親王と弟の第二代能久親王(当時はその弟の子成久王)、華頂宮の初代博経親王(当時は伏見宮貞愛親王の孫博忠王)、東伏見宮家の初代依仁親王、および一代で終わった小松宮の彰仁親王は、いずれも邦家親王の王子である。
- なお、梨本宮の初代守修親王は邦家親王の弟であるが、当時は久邇宮朝彦親王の子守正王が継いでいる。さらに賀陽宮の初

代邦憲王と朝香宮の初代鳩彦王と東久邇宮の初代稔彦王の三方も、朝彦親王の子であり、竹田宮の初代恒久王も、北白川宮二代能久親王（邦家親王の王子）の子である。つまり、当時の宮家は、大正天皇の直宮三家（秩父宮・高松宮・三笠宮）成立以前だから、すべて伏見宮邦家親王の子孫で占められていたことがわかる。

(7) 昭和二十一年（一九四六）年末当時、直宮以外の傍系宮家は十一を数える。そのうち、山階宮は第三代武彦王（四十八歳）のみ、東伏見宮家も初代依仁親王の妃周子（七十六歳）のみ。また閑院宮家は第七代春仁王（四十四歳）と妃直子のみ。梨本宮も第三代守正王（七十二歳）と妃伊都子のみ（二女王は降嫁）であったから、このような後継男子のない四家は、当代限りで終るほかなかった。

しかし、久邇宮家は第三代朝融王（四十五歳）と妃知子と三男五女（計十名）、賀陽宮家は第二代恒憲王（四十六歳）と六男一女（計八名）、また朝香宮家は初代鳩彦王（五十九歳）と妃允子内親王と二男二女（計六名）、東久邇宮家は初代稔彦王（五十九歳）と妃聰子内親王と二男など（計四名、他に一男が事故死、一男が降下、のち女子二名）、竹田宮家は第二代恒徳王（三十七歳）と妃光子と二男二女（計六名、降下直後に恒和誕生）、さらに北白川宮家は戦死した永久王の母房子内親王と妃祥子と第五代を継いだ道久王（九歳）と妹肇子女王（計四名）がいた。つまり、この翌年に皇籍離脱を余儀なくされる十一宮家の皇族は、合計五十一名（男性二十六名、女性二十五名）、そのうち男性の十六名が三十五歳未満であった。

とはいえ、大正九年の「皇族ノ降下ニ関スル施行準則」が戦後まで適用されている場合、邦家親王の玄孫（四世）当主とその家族までは皇族でありえたが、次の五世からは当主も含めて全員臣籍（華族）に降下することになっていた。ただ、注意すべきことは、すでに明治天皇が内親王の四方を四宮家（竹田宮・北白川宮・朝香宮・東久邇宮）に降嫁せしめておられ、その方々を生母とする子女は、血縁的に大正天皇・昭和天皇と極めて近い。もし男系（父系）だけに限らず女系（母系）も認めるからいえば、この四宮家は他の宮家よりも重要な意味をもつとみられる（系図D参照）。

(8) 法制局で用意された「皇室典範に関する想定問答」（芦部信喜・高見勝利両氏編『皇室典範』Ⅱ日本立法資料全集1所収、信山社、平成二年。のち拙著『近現代の「女性天皇」論』（展転社、平成十三年）参考資料にも収録）によれば、新典範第九条（養子）に関しては、旧典範文にない「天皇及び」を加えた理由（答「歴史上、天皇養子の事が多かったから、本条の如く規定する」）、また養子を「する」という意味（答「皇族が養子をすることを禁ずれば、自ら皇族が（他の）皇族の養子となることも禁ぜられる」）、さらに「婿養子もできぬ」論拠（答「第十二条（皇族女子が皇族以外的一般男子と婚姻したときは、皇

族の身分を離れる」にも該当するから……できない」という三点のみ問題としているにすぎない。ただ、昭和二十一年七月の臨時法制調査会では、宮沢俊義委員が、皇族に養子を認めながらその養子を皇族としない案を示したこともあるが、以後の論議には出てこない。園部逸夫氏『皇室法概論』（平成十四年、第一法規出版）五五二頁参照。

- (9) 宮内庁編『皇室制度史料』の「皇族一」（吉川弘文館、昭和五十八年）特に「皇族と養子」（二〇六～二七一頁）および同「皇族四」（同六十一年）特に「四親王家の成立と展開」「近代の宮家」（四四～二四六頁）。

- (10) 明法博士の坂上明基（一一三八～一二一〇）撰『法曹至要抄』（群書類従律令部所収）に「養子之法、無_レ子之人、為_レ繼_二家業_一所_二取養_一也」とある。

- (11) 井上光貞氏他校注『律令』（日本思想大系3、岩波書店、昭和五十一年）「戸令」補注12五五三～四頁参照。『令集解』所引「古記」（天平十年ころ成立の「大宝令」注釈書）に「今時人、多以_二己親弟・従父弟等_一為_二養子_一」と実情が記されている。なお、養子を取ることができるのは、「唐令」と同じく男性に限っていたのであろうが、鎌倉幕府の『御成敗式目』（石井進氏他校注『中世政治社会思想』上へ日本思想大系、岩波書店、平成六年）所収）では「女人養子事」の一条があり、「至_二于当世_一、無_二其子_一之女人等、讓_二与所領於養子_一事、不易之法、不_レ可_二勝計_一」との実情が公認されている。

- (12) 『皇室制度史料』皇族一（一二七～九頁）には、もう一例、第七五代崇徳天皇と異母弟近衛天皇の「養子関係」も、参考までに付載されている。『今鏡』によれば、保延五年（一一三九）鳥羽上皇と藤原得子（美福門院）の間に生まれた「おのこ宮」（体仁親王）は、「たうだい」（当代＝崇徳天皇）のみこになしたてまつり、また「中宮（藤原聖子）」を御はは（養母）に「され、わずか三ヶ月で「東宮にた、せ給」ている。ただ、翌六年、崇徳天皇に第一皇子重仁親王が生まれたにもかかわらず、翌七年、鳥羽上皇によって崇徳天皇が讓位を余儀なくされた。しかも後継の体仁親王（近衛天皇）を「みかどの御やしないう、（養子）例なきことにて、皇太弟とぞ宣命にのせられ」たという。

- (13) 伏見宮第十一代邦尚親王は、宝永三年（一六二六）十月、親王宣下を受けているが、当代の猶子となったか不明である。しかも承応二年（一六五三）十一月、父貞清親王に先立ち薨じたから、代数に入れない説もある。ただ、その王子が第十三代貞致親王となっているためか、『伏見宮御系譜』などでは、第十一代の宮家当主としている。

- (14) 八条宮＝桂宮初代の智仁親王は、初め「太閤」豊臣秀吉の「猶子」とされていたが、鶴松の誕生によって破棄された（『長尚愚記』等）。後（慶長三年）には後陽成天皇が突如この親王に讓位しようとしたけれども、「内府」徳川家康の反対により

沙汰止みとなった『御湯殿上日記』こともある。

(15) ただ、桃園天皇の崩御された宝暦十二年（一七六三）当時、伏見宮家には貞行王（三歳）、京極家Ⅱ桂宮家には家仁親王（六十歳）と公仁親王（三十歳）、有栖川宮家には職仁親王（五十歳）と織仁王（十歳）、閑院宮家には典仁親王（三十歳）と美仁王（六歳）が合計七名いた。これらの皇族男子をさしおいて、智子内親王（後桜町女帝）が擁立されたのは、その甥にあたる英仁親王（後桃園天皇、五歳）への継承を確実にするための中継ぎにはかならないとみられている。野村玄氏「女帝後桜町天皇の践祚とその目的」（同『日本近世国家の確立と天皇』所収、清文堂出版、平成十八年）参照。

(16) 敏宮淑子内親王が桂宮家を継ぐことになった一因は、文久元年（一八六一）十二月、それまで桂御所に仮偶していた和宮親子内親王が將軍家へ降嫁するために空いたので、彼女が暫く仮住居していたからである。彼女は同三年四月、あらためて第十一代当主として桂御所へ入り、慶応二年（一八六八）四月、一品に叙され准三宮の宣言を受けたが、独身のまま明治十四年（一八八一）十月、五十三歳で薨じた。その間に後継の養子を迎えていなかったため、ここに桂宮家は三百年近い歴史を閉じるに至った。久保貴子氏「桂宮家と女性当主」（『歴史読本』平成十八年十一月号「特集 天皇家と宮家」所収）参照。

(17) 高埜利彦氏「江戸幕府の朝廷支配」（『日本史研究』三一九号、平成元年）、久保貴子氏『近世朝廷運営』（岩田書院、平成十年）、若松正志氏「閑院宮家の創設」（『歴史読本』平成十八年十一月号）等参照。ちなみに、閑院宮家が創立された当時、朝廷と幕府の協調関係ができており、とりわけ前関白の近衛基熙（祖父は後水尾天皇の実弟近衛信尋、その正室は後水尾上皇の皇女Ⅱ品宮常子内親王、その娘照子は將軍徳川家宣正室Ⅱ天英院）が宝永七年（一七一〇）江戸下向中に將軍家宣と会い、この件でも話し合っている。

(18) 本稿では、現行典範の男系男子限定主義を前提にした上で、その男子三方が継承されていく場合の在り方を論ずるに留めた。しかしながら、私は拙著『皇位継承のあり方―女性・母系天皇の可能性―』（PHP新書、平成十八年）所収論考などにおいて、男系男子を優先するにせよ、男系女子の女性天皇も女系男女の母系天皇も、制度的に公認して皇位継承の可能性を広げておくべきこと、それと共に皇族女子が一般男子と結婚されても女性宮家を創立して皇室に留まりうるようにすべきこと、その所生男女にも継承資格を容認すべきこと、などの改正案を提示してきた。ただ、その場合でも、さらに皇族間の養子および養子による皇位・宮家の継承も可能とする道を広げておくべきだと考えている。

（平成二十二年七月七日）